

チェルノブイリの経験から ら学ぶ：子どもたちの腎臓と 免疫のやさしいお話

小児の体を守る「がんばり屋
さんのフィルター」と、
未来に向けたケアの軌跡

1990年 | A.V. Sukalo, I.N. Usov (ミンスク)



なぜ、腎臓だったのでしょうか？

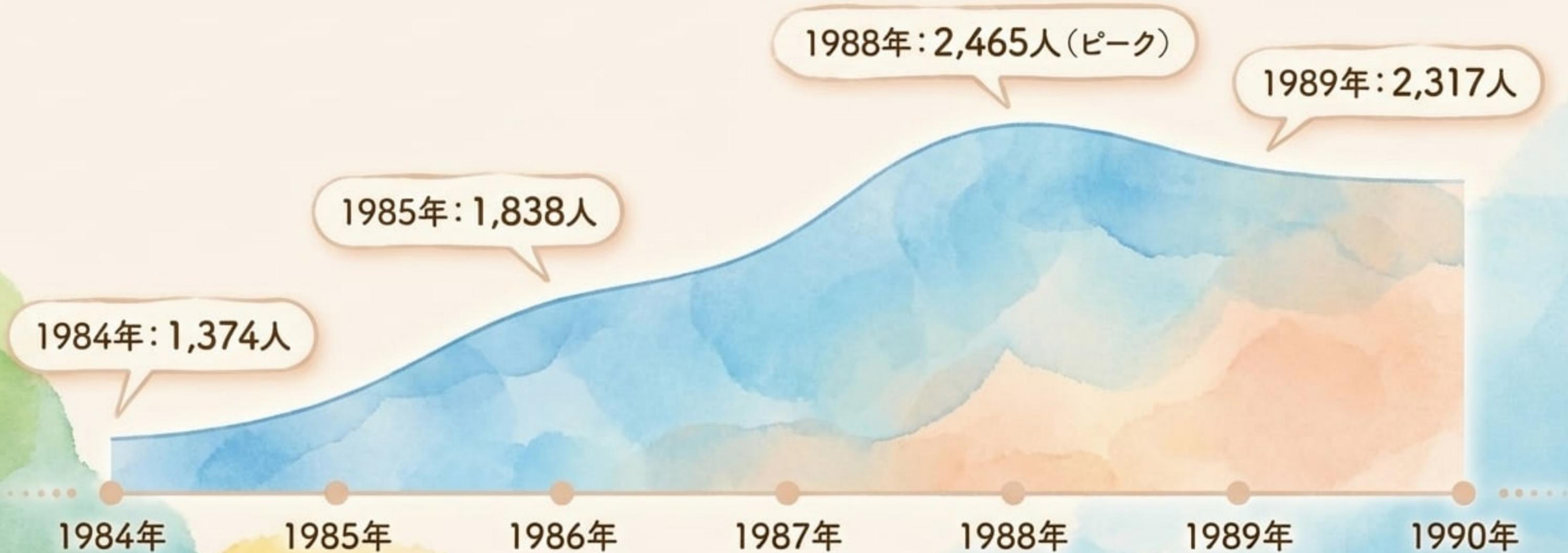
事故後、環境中に放出された物質（セシウム137）は、主に食べ物と一緒に子どもたちの体の中へ入りました。



セシウム137の約**90%**は、尿と一緒に体の外へ排出されます。つまり、体の中の「がんばり屋さんのフィルター」である腎臓が、一番負担を引き受けることになったのです。

モギリョフ州の子どもたちにかきた「大きな波」

事故後、子どもたちの腎臓には急な負担がかかりました。
特に多かったのは、「急な腎臓の炎症」を示すサインです。



※急性腎盂腎炎 (38.3%増) および急性糸球体腎炎 (32.5%増)。1990年以降は罹患率が安定化する傾向が見られました。

55人の子どもたちから教えてもらったこと

ネフローゼ症候群（腎臓のフィルターが弱ってしまう病気）を抱える4～12歳の55人の子どもたちの経過を、2つのグループに分けてそっと見守りました。



調査群（25名）

ゴメリ州・モギリョフ州（影響が大きかった地域）



対照群（30名）

ミンスク州・ビテブスク州（影響が少なかった地域）

病気のきっかけ：小さな風邪が、大きな負担に

普通の風邪（急性呼吸器ウイルス感染症）が引き金となって腎臓の症状が出る・再発する割合が、調査群では2倍以上も高くなっていました。体がとても敏感になっていたのです。

43%

(小さな風邪で症状が出やすい)



20%



外から見えたサイン：体が一生懸命に反応していた証拠

症状のサイン	調査群（影響あり）	対照群（影響なし）
 むくみ（浮腫）	25人中22人。腹水や全身のむくみなど、より強く長引く傾向。	比較的軽い
 心臓の反応・心の揺れ	対照群の2.5倍の頻度で観察（自律神経の変化、高い情緒不安定性）	通常レベル
 リンパ節・肝臓・脾臓の腫れ	90%の子どもたちに見られた	わずか5%

※一方で、高血圧は調査群でもほとんど見られませんでした（2例のみ）。

フィルターからの「一時的なSOS」

尿の検査では、通常この病気では見られない特別なサインが見つかりました。



尿の中の赤血球（血尿）：



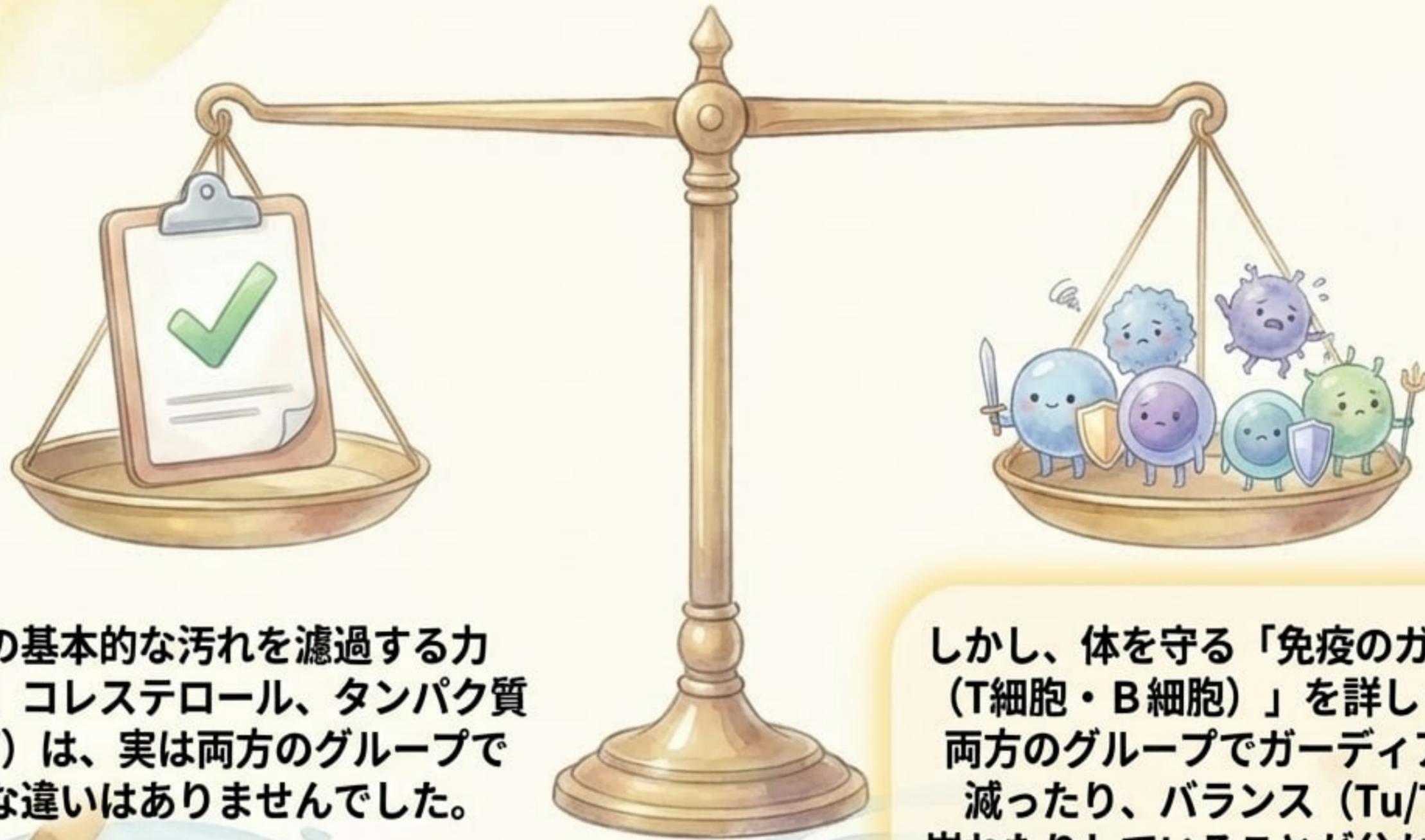
顕微鏡で見ると、調査群では7人の子どもに多数の赤血球が見られました（対照群は1人のみ）。これは1986年末～1987年初頭にかけての「一時的なサイン」でした。

早期のSOS（好酸球増多）：



事故後2～6ヶ月という早い時期に検査を受けた5人の子どもには、アレルギー等がないにもかかわらず、白血球の一種（好酸球）が16～25%と高く出ました。体が何かと闘おうとしていた初期の反応です。

表面上の数値と、見えないところでの闘い



血液の基本的な汚れを濾過する力（尿素、コレステロール、タンパク質など）は、実は両方のグループで大きな違いはありませんでした。

しかし、体を守る「免疫のガーディアン（T細胞・B細胞）」を詳しく調べると、両方のグループでガーディアンの数が減ったり、バランス（Tu/Ty比）が崩れたりしていることが分かりました。

大きな違いは 「緊急SOS信号 (IgA)」の強さ

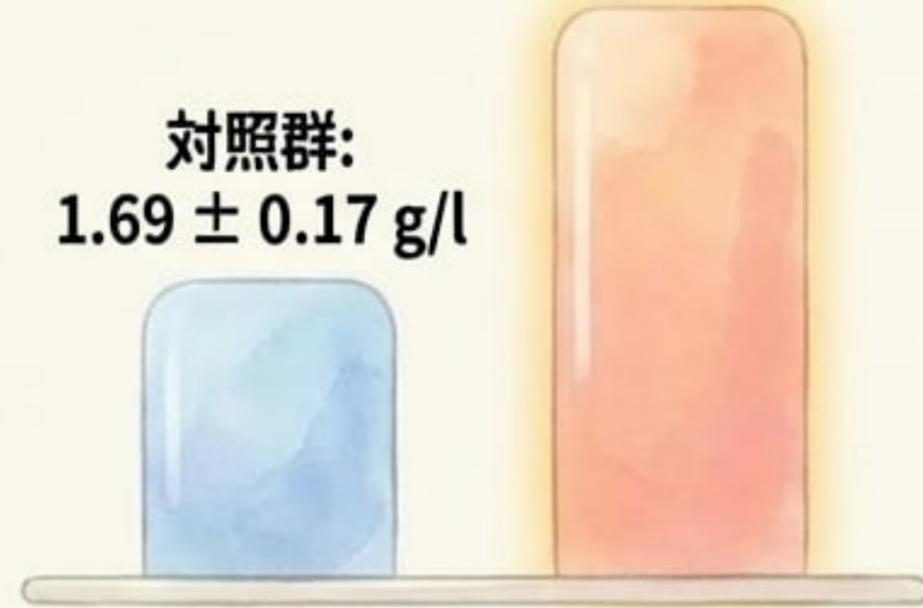
免疫の働きの中で、決定的な違いが
一つだけありました。

粘膜などで体を守るバリアの役割をする
「免疫グロブリンA (IgA)」の量が、
調査群で特別に高かったのです。



調査群: 3.03 ± 0.65 g/l

対照群:
 1.69 ± 0.17 g/l



これは、子どもたちの体が「見えない敵」に対して、
一生懸命に強いバリアを張って闘い続けていたとを示しています。
(※IgGにも上昇の傾向が見られました)

なぜ、回復に時間がかかったのでしょうか？

表面上は同じ病気に見えても、調査群の子どもたちの体は、見えないところで全力で闘い、疲弊していました。そのため、治療への反応や回復のペースに大きな違いが生まれました。

強い緊急信号
(IgA高値)

体の過敏な反応
(リンパの腫れなど)



お薬が効きにくい
(治療に対する抵抗性の増大)

再発しやすい
(入院中の再発が1.4倍)

入院期間の延長
(平均して19日長く病院で
過ごす必要がありました。
8人は炎症のサインが
持続しました)



がんばったフィルターには、長くやさしいサポートを



チェルノブイリの経験が私たちに
教えてくれた一番大切なこと。
それは、影響を受けた地域の子ども
たちの体は、私たちが思う以上に
「見えないところで頑張っていた」
という事実です。

だからこそ、症状が治まったからといって安心するのではなく、
特別で、継続的な、予防的健康診断（やさしい定期チェック）を
長く続けていくことが何よりも大切なのです。